

弱者いたわる惻隱の情

フランシスコ・ザビエルは、日本人は貧乏を恥としないことに大変驚いたそうです。貧乏な武士が金持ちの町人に尊敬されているのはなぜか。よく観察すると、武士は高い道徳倫理、武士道を持っていたからだとかわかったそうです。このように日本はかつて拝金主義には最も遠い国でしたが、最近はどうでしょうか。

今、日本をはじめ、世界中を市場原理主義が席卷していますが、私は、これでは人類は幸せにはなれないと思います。

市場原理主義は結局、規制をなくして、公平に競争した結果、勝ち組、負け組が生まれる。それは自己責任だから仕方がない。こういう論理だと思いたすが、例えば小学校六年生（＝大企業）と一年生（＝中小企業）が公平に喧嘩したら、前者が勝つのが当然でしょう。そもそもそんな喧嘩は卑怯と思い、弱者をいたわる心、側隱の情を持つことが美しい日本の精神ではないでしょうか。弱者保護のための適切な規制のもとでの競争こそが、資本主義社会で求められるのです。

☆

一九八〇年代、日本経済は世界で一人勝ちの状態でした。そのとき、欧米、特に米国からは、終身雇用や年功序列を基盤とし、従業員の忠誠心を高め、家族的な雰囲気での日本式経営はあまりに特殊だ、時には異常だと厳しく批判されました。以来、日本は、批判を避けるために普通の国になろうと努力した結果が今の状態です。といっても、まだ世界二位の経済大国ですが。

しかし、もし日本が、このままほんとうに普通の国になったら、人口は中国の十二分の一、面積は二十五分の一、その程度の国力にしかならないのです。なぜ日本は、日本的な家族観や倫理観に基づいた日本式経営を放棄して、成果主義、実力主義の経営をしなければいけないのでしょうか。日本式経営は、むしろ世界がまねをしなければならぬものであり、最も進んだ資本主義と言えらると思います。さらに、いま日本に必要なのは、論理より「情緒と形」、英語より国語であり、日本人としての誇りを取り戻すことです。

☆

グローバリズムといっても、結局、それは米国のみには適合しない世界標準（グローバルスタンダード）なのだ、世界中の人は早く気づくべきです。フランスやイタリア、スペイン、その他のラテン系の国々やアジア、アラブ諸国の考え方や倫理観からはほど遠いものですし、また英国も米国とは大分

違います。

私は、二十一世紀はローカリズムの時代だと思います。グローバリズムで世界標準が決まれば、効率的かもしれませんが、地球各地の言語、文化、伝統、情緒等々をお互いに尊敬し、それを育てていく。これがローカリズムであり、また戦争やテロを減少させる方法だと思います。

戦争やテロを減少させるには、論理や理性も不可欠ですが、それだけではなく、相手を思いやる心、側隱の情や郷土の自然を愛する心などの美しい情緒で世界を満たすことも必要でしょう。

☆

私の曾祖父は江戸末期に生まれた武士で、武士道をもって、私の父をしつけ、その父に私はしつけられました。私が『国家の品格』で、武士道が大切だと述べたのは、その辺に由来しています。

武士道といっても、戦争のなかった江戸二百六十年の間に、それは町人や農民の庶民にまで広がり、もはや日本精神と言ってもいいものになりました。私が教えられたことの一つに、人の弱みにつけ込む火事場泥棒は最も忌むべき犯罪だということがあります。実際、海外では大震災などが起こると、必ずと言っていいほど、略奪行為が起きます。しかし、阪神淡路大震災のとき、日本では一つとして略奪が起らなかったのです。私は、「ああ、日本ではまだ武士道はみんなの胸の中で生きているのだな」と嬉しく思うと同時に、子供のときに、きちんとした行動基準、判断基準が与えられることの大切さを改めて認識した次第です。